



宮崎県高千穂町が国連農業機関（FAO）認定の世界農業遺産に昨年指定され、これを機会に高千穂町との共催で地球研地域連携セミナーが1月20日現地で開催されました。熊本空港から雪道を2時間かけて夜10時過ぎに到着しましたが、遅い夕食を兼ねて入った居酒屋では、お皿に山盛りの香菇（こうこ）とよばれる大きくて厚いシイタケの塩焼きをつまみに地元の焼酎の組み合わせで、まず農業遺産の一端を味わいました。翌朝は宿の電動自転車を借りて町内を走ってみました。高千穂神社から有名な高千穂峡に下り、さらに町の郊外の棚田へ回りましたが、道ですれ違ったおばさんも女子高生も、見ず知らずの私に「こんにちは！」とあいさつをしてくれました。

セミナーは阿部健一教授の基調講演、国東半島で農業を営む傍ら、伝統的な七島イ（昼用のイ草）の栽培を復興させた林浩昭氏の基調報告に引き続き、高千穂町の方々によるパネル討論が行われましたが、とても刺激的でした。専業農家の佐藤さんは山間地での棚田稲作と冬場の森で無農薬シイタケ栽培を小規模ながら営んでいるが、重労働だが楽しいと述べられました。畜産農家の田邊さんは、持続可能な農業には、夜の焼酎飲み会や神楽を通じた地域の結束力が重要であることを強調されました。高千穂神社宮司の後藤さんは、英語の **society** が明治初期の知識人により「社会」と訳されたのはなぜかということに触れ、「もともと、神社で行われる直会*（なおらい）が地域コミュニティを象徴していたところから、『社会』と名付けられたのです」という興味ある指摘をされました。地元産の山菜・野菜のみでレストランを営む坂本さんは、「旦那と喧嘩して家を出ることはあっても、高千穂の町を出ることはありません。」と、町の住みやすさをさらりと語られました。

高千穂町といえば、高天原の神々の神話時代から千年以上続いているとされる神楽の里です。保育園児から年寄りまで、神楽と共に町の人々は育ち、暮らしています。セミナーの余興として、5歳の保育園児が、艶めかしい夫婦神楽を演じてくれましたが、私の隣に座っていた町長さんは「園児にこういうのをやらせていいのやら..」と言いつつも、とても嬉しそうに見ておられました。その夜は、車で20分ほどの山あいの地区で夜神楽があるというので、見に行きました。当番農家（神楽宿）の座敷舞台では、単調でリズム的な太鼓と笛の音に乗って、数人のグループによる神楽舞が次々と奉納されていました。全部で三十三番の神楽舞を、夜を徹して演じるということです。地域ごとの氏神に奉納する神楽舞を保存し続けることは、地域社会の持続性にとって非常に重要な役割を果たしているはずで、後藤宮司が言われていた「氏神さまというのは、宗教というより自然への畏敬です。」という言葉と合わせると、この地域では、人と自然の共生的つながりを保った社会が、まさに神楽を通して維持されてきたのではないかと感じました。哀調的な神楽の調べと舞に浸りながら、そんな思いに駆られていました。



*：直会：神社での神事後、神酒や神饌を頂きながら行う宴会で、神事の一部ともされている。